上にねこ、ねこの上に
にわとりが乗る
と、家の中へ向かって、
四ひきは、大声で、いっせい
にどなりました。
「ヒン、ワン、ニャーゴ、
コケコッコー！」
どろぼうたちは
大あわて、「おばけが
出た！」と、ごちそう
も、品物もそのまま
にして、みんなにげ
だしてしまいました。

やがて板書を終り、子どもたちもほとんど書き終る。

そこまでにして下さい。お帳面を閉じて下さい。また、一度、声を出さないで読んでもらいます。

五　よ　む

指黙読。師のむちに導かれ、ゆっくり板書を黙読してい

く。

昨日のように、しっかりした声でやりましょうね。

指音読。厳しい修行によってきたえられ、磨かれた、鮮やかなむちさばきによって、教室いっぱいに音読が流れる。

うまいね。あんまりうまいから、もう一度やるかな。

指音読二回

はい。よかったな。

このとき、子どもの中から質問が出る。

○　先生、「どろぼうたちをびっくりさせてやろう。」というところには丸をつけて、「ヒン、ワン、ニャーゴ、コケコッコー！」の下には、どうしてあんなしるしをつけるの。

うん、これね。これはあとでお話してあげるよ。お勉強が終ってからな。よし。

六　と　く

いいか。さ、ここからここまで(全文のこと)みなさんの番号つけた6のところですね。これを二つに切ることができるさ。どこで切ったらいいか。こんなことなんでもないさ。あなたは。

五　よむ

・指黙読は、ゆっくりと鞭を動かし、指音読になったら、読む速さに合わせて、半呼吸前を指すように鞭を振る。

・鞭は、文字を指すのではなく句のまとまりを意識して波形に動かす。句読点では、黒板を軽く押さえて音を出すと、読みやすい鞭捌きになる。（板書三年、鞭八年などと先達は話している）

・あんまりうまいから、もう一度やるかな。こうすると、さらに読み声に張りが生まれる。

・上手でないので、もう一回とは決して言わないこと。懲罰気味に読ませるのは、士気を失わせ、子どもを育てることにつながらない。そんなときには、無理をしないでやめるのがよい。

・児童の質問、記号の「！」についての対応は、学ぶべき点が多い。

六　とく

○　語義・区分

・語義として扱う言葉がないので、(実は、今後の扱いの中に入れている)区分から入っている。

・区分の問いかけ方には、学ぶべきことがある。

○　はい、「大声でいっせいにどなりました。」のところで切ったらよいと思います。
うん……。おしかったなあ。あなたは。
○「どろぼうたちは」のところ
そのどっち？　前か？
○　はい、前
そう、そう、そう。ここです。ここで二つに切ればいいですね。(黄色で縦に線を引いて区分する。)こっちは(前半)誰のこと？　あなたは。
○　動物たちのことです
動物たちの、これは、四匹の動物たちのことでしょう。(四匹に、傍点をつけ)
それじゃ、こっちは(後半の文)誰のことか。あなたは。
○　どろぼう
そう、どろぼうたちのことです。(どろぼうに、傍点をつける。)さあ、この四匹の動物のところを、二つに切ってみなさい。これ、ちゃんと切れたら、先生、その人におじぎします。しっかり考えなさい。
子どもたち、目をさらのようにして見ながら、真剣に考えている。

動物たちは二つのことをしたんだよ。あなたは。
○「ろばの上に犬」というところで切る
ここか……。おしかったなあ。あなたは。
○「にわとりが乗ると」というところ
(と、の下を指さし)ここ？　(子ども、うなずく)えらいところで切ったが、おしかったなあ。えらいおしかったなあ。もう少しのところで、先生、おじぎをするところでした。ちょっとのところで、おじぎできない。ほんのちょっとのところだよ。(指先でその「ちょっと」を表現される。)よそのところへいっちゃだめだよ。このへんだよ。あなたは。
○　四ひきは、いっせいにどなりました。
だめだめ。そんなにいっちゃだめだよ。この人、ここでちょっとのところでおしかったろう。そしたら、あなたは。
○「にわとりが乗ると」の前
ここで切るの。(と、の前を指さす。)
子どもうなずく。師、その子にゆっくり、丁寧におじぎされる。参観席、みんなにこにこして見る。
ここで切らなくちゃならない。そうすると、文章を直

切るところがはっきりしたら前半は誰のことで、後半は誰のことかを確認する。
・さらに、動物たちのところを二区分させている。その問いかけも面白い。(愉快なことを真面目にやっているところが、授業は師弟の共作であると感じる)

笠原昭司先生の感想文より

第一次

○題目　師は、ずばり、「楽隊」に切り込んでおられる。
「ブレーメンの楽隊というお話だが、楽隊というのは、ひとりでできるか。」
というのが、第一問である。「楽隊のうちの「隊」からほぐしていかれた。以下、
1　たくさんの人数がいる。
2　それぞれ違う楽器が使われる。
3　何びき編成の楽隊か。
4　四匹の楽器は声（鳴き声）
というように、あくまでも、「楽隊」の「隊」をおさえられる。それでいて、ちゃんと文章に密着している。…中略…師は、何気なく出しておられるが、非凡な第一問である。録音で繰り返し聞いてみても、味わい深い第一問である。何よりも、この問いに対する子どもの反応が前向きなのがそのことを証明する。子どもを第一問に完全に引きつけられておられる。

さなくちゃならんな。「ました。」「ました。」と書いているな。それに、「乗る。」じゃおかしいじゃないの。にわとりが……。分るでしょう。あなたは。

○　乗りました

そう、「乗りました。」だね。えらい三年生だなこりゃあ。（「る」を斜線で消し、傍に「りました。」と加筆。）たいしたものだよ、こりゃあ。ついでに、「と」のところも直しなさい。（「と」の傍をトントントンと軽くたたき、三音の語であることを暗示。）あなたは。

○　そして

うん、「そして」。うまい。（「と」を消して、傍に「そして」と加筆）とってもうまいなあ、こりゃあ。さあ、それじゃ、ここはね、ここまで一つだよ。うまいところ切ってくれたね。あなたのおかげだよ。あなたの手柄だよ。あなたが先に、あれ言ってくれたから、この人ぴたっときたのね。このくらいのところだったね。おしかったなあ。

さ、ここまでは、四匹何をしたところ？

あなたは。

○　びっくりさせてやろうと

びっくりさせてやろうとして、どうしたところ？　あなたは。

○　ろばの上に犬、犬の上にねこ、ねこの上ににわとりが重なったところ。

まとめて言ったら？　あなたは。

○　乗りました

そう、ここは乗ったところ。ここは乗ったところです。そしたら、こっちは何したところなの。あなたは。

○　向って

向って何したところ？

○　大声でどなりました

大声でどなったところね。（「どなる」の語に傍点をつける。）どなるって分るか。これ以上大きな声が出ないというような大きい声でさけぶことだよ。（「大声」の語に傍線を二本つける）ここは、どなったところですね。

そしたら、ここは（後半）どろぼうたち何したところ？

なんでもないさ。あなたは。

○　逃げたところ

そう逃げたところ。（「にげ」に傍点をつける）さあ、どろぼうたちは、逃げましたよ。逃げたのは、動物たちが、

・区分するという具体的な事実に即して、文法的な扱いをされている。必要に応じて文法的な扱いを工夫できるところにも、この指導法の価値が見られる。作文の基礎指導にもなっている。

・区分したところを動詞で確認している。

（問いと答えのかかわり方）

・四匹が何したところ…。

乗りました。

・こっちは…。

大声でどなりました。

・泥棒達が何したところ…。

にげだしました。

どうしたから逃げたのかな。動物たちが乗ったから逃げたのかな。それとも、どなったから逃げたのかな。どっち？　あなたは。

○　どなったからです

どなったからびっくりした。この中のどれでびっくりしたの。あなたは。

○「ヒン、ワン、ニャーゴ、コケコッコー！」

その何にびっくりしたの。あなたは。

○　はい、声です

声。大きな声でびっくりした。（大声に傍線二本つける）一番先に声を出したのは誰だ。あなたは。

○　ろば

と思う人。（大部分の子ども挙手）じゃ二番は？　あなた。

○　犬

と思う人。（大部分の子ども挙手）多分そうくるだろうと思った。一番先に声を出したのは誰だ。あなたは。

○　みんな

みんなだ、みんなだよ。「みんないっせいに」というのは、そういうことだよ。みんな、これ一番だよ。そうでなくちゃ楽隊にならんじゃないか。こっちでたいこをたたく。それが終ったら、こんどはラッパをならす、それじゃ楽隊にならんのだよ。ラッパもたいこも、ハーモニカもいっしょに「じゃーん」とやるから、楽隊になるだろう。これ、いっしょだよ。みんな一番だよ。

ろばはあらん限りの声を出して「ヒーン」とやる。犬も一緒に「ワーン」とやる。ねこも一緒に「ニャーゴ」とやる。にわとりは、「コケコッコー」とやる。これ、一緒だよ。どんな声になる？　とんでもない声になるだろう。これでは、腰がぬけるほどびっくりするさ。それ、一匹ずつだったらわかる。「ヒーン」、あれろばだな。「ワン」、これ犬だな。「ニャーゴ」、ねこだな、と分るけれども、一緒だもの。一緒に「ぐわーん」とやるから、さあ、びっくりして、逃げ出した。

それじゃ、こっちの方は、びっくりさせることができなかったろうか。家の中と外で、明るいのはどっち。あなたは。

○　家の中

家の中だろう。外は暗いんだろう。明るいところから、暗いところがよく見えるか。

○　見えません

◎心

笠原昭司先生の感想文より

板書の区分は、
乗った
どなった
にげた
である。こう区分すると、どなったが、最大の山であり、「楽隊」の実態になることは明らかである。「泥棒達が、びっくりして逃げたのは、乗ったからかな。どなったからかな。」と問うだけで「どなった」が出てくる。しかし、師はまだ。種を出されない。

「何にびっくりしたの」（声）

「大きな声なのにびっくりした。一番先に大きな声を出したのは」（ろば）

「そうかな」（犬）

と、ここに、子どもを充分に引きつけられてから、「いっせい」という語を押さえられる。この「いっせい」で、この童話のもち味が、ぱっと、文字通り「いっせい」に開くのである。

「楽隊の演奏は、ハーモニカを吹いたら、次はたいこ、その次はラッパ…というようにやるのではないだろう。ヒン、ああ、ろばだな。ワン、ああ、今のは犬だな…とすぐ分かってしまう。…」というように話されてから、まことに面白く「ブレーメンのがくたい」を実演された。子どもも勿論喜んだ。

見えないだろう。ひょいと見たら、なんだかわからないが、ぐーっと高いものがまどから見えたよ。なんだろうかな。ろばの上に犬、犬の上にねこ、ねこの上ににわとりが乗っているから、えーらいぐーっと長いものがね。なんだかえたいのわからないものが、一緒に「わーっ」とやったもの、こりゃ驚いたさ。さあ、こっちは一番おどろき、こっちは二番おどろき。さあ逃げ出したよ。

どろぼうなんて、とっても、人間としてだめな人間なんだね。とってもあぶないね。見つかって、つかまったりしては大変でしょう。それなのに、どうしてどろぼうなんかしているんだろう。そんな危いことを、なんでやっているの。

○ 品物を盗んで

そう、品物欲しいから、どろぼうするんじゃないか。(「品物」に傍点)うまいごちそう食べたいから、どろぼうするんじゃないか。そのごちそうも、せっかく、危い目をして盗んできた品物もそのままにして、「おばけだ！」と言って逃げ出したもの。こりゃ、おかしい話だろう。

このところ、「。」(まる)をつけないで、これ「！」つけているのは、えらい力を入れて言うところだよ。「おばけが出た！」(と力を入れて言ってみせ)それをね、「おばけが出た。」(弱々しく言ってみせて)なんて言っちゃだめだよ。だから、これをつけたんだよ。分ったか。いいか。(前に質問した子、うなずく。)さあ、かねが鳴ったけれども、しっかり読んでおしまいにしましょう。

七 よむ

板書を一斉に指音読する

おかしいどろぼうたちだな、こりゃあ。それじゃ、おしまい。

静かにおじぎされる

第二時板書事項

「どろぼうたちを、びっくりさせてやろう。」
ろばの上に犬、犬の上にねこ、ねこの上ににわとりが乗る。」

そして、家の中へ向かって、四ひきは、大声で、いっせいにどなりました。
「ヒン、ワン、ニャーゴ、コケコッコー！」
どろぼうたちは、大あわて、「おばけが出た！」と、ごちそうも品物もそのままにして、みんなにげだしてしまいました。

・それぞれの驚きについてその特質を見せて、その価値をはっきりと示している。

・泥棒についても考えさせている。そんな泥棒達が逃げ出したところにこの話の面白さが潜んでいることもにおわせている。

・児童の質問「！」にも、内容と合わせて語義指導をしている。

○ 余韻

・本当におかしな泥棒達だなあ。

七 よむ

(視写した文章を指音読する)

・この読み声で、授業の評価ができる。声に張りがあり、勢いが出た時には、子供達が満足した証しである。

笠原昭司先生の感想文より

これは、「楽隊」一つに絞られたご教壇であると思う。しかも、種は一つというまことに、ぎりぎりのご教壇である。それだけに、一つひとつの問いが、抜き差しならぬものであり、それが、全て、子どもにぴしりとはまる。しかも、童話のもつ味わいが、自然と教室にみなぎるというものであった。